

橘 玲『言ってはいけない—残酷すぎる真実—』（新潮新書、2016）の書評

本書は面白い書き出しから始まる。「最初に断っておくが、これは不愉快な本だ。だから気分よく一日を終わりたいひとは読むのをやめたほうがいい。だったらなぜこんな本を書いたのか。それは世の中に必要だから。」たしかに、社会にはきれいごとに隠された真実がある。本書では、目を背けたくなるような残酷な真実が著されている。

本書は、三部で構成されている。第一部の章題は、「努力は遺伝に勝てないのか」である。親から子へと外見や性格が遺伝することは多くの人が受け入れている事実である。「親が長身であれば子供も長身になる」という言説はごく自然に、当たり前のことのように受け入れられる。しかし、「太った親からは太った子供が生まれる」という言説には拒絶感を示す人が多い。表現が違えば、同じ外見の遺伝を示している、受け止め方が異なる。これは私たちの社会に暗黙の規範があるからだ。「子供は元気で明るくあるべきだ」という規範は、「暗い地味な子供には問題がある」という見方を暗に含んでいる。また私たちは規範から逸脱することを遺伝のせいにはいけないと思っている。なぜなら体型や性格に問題があるとしても、それは本人の努力や親が与える環境によって変えることができる、と信じているからである。しかし、遺伝による影響を排除してしまうことは、どんなに頑張っても明るくできない子供たちの逃げ道を塞ぎ、心を深く傷つけることになりかねない。他にも、暗黙のうちに遺伝してはならないと考えられている知能や依存症、精神疾患や罪を犯しやすい特性も遺伝することが具体的な数字から明らかになっている。すなわち、「努力は遺伝に勝てない」ということを示している。しかしこの残酷な真実を受け入れることは大きなメリットにもなる。例えば、自分が遺伝的にアルコール依存症になりやすいとわかっていれば、アルコールに手を出さないという選択を意識的に取ることができる。能力が遺伝であることを受け入れていれば、事前に対策を取ることができる。また、自分に何が向いているのか、向いていないのかを知ることができ、それによって良い選択をすることができる。

本書の第二部は、「美貌格差」を扱っている。見た目で人生が左右されるということは薄々誰もが知っていることだ。残酷なことに、仕事をする上でも美人やイケメンは優遇される世の中である。美貌には経済効果がある。容姿による経済格差が存在することも具体的な数字で明らかになっている。そして美貌格差は男性よりも女性の心理的圧迫になっている。これは男性が女性の若さや外見（生殖能力）に魅力を感じるからであり、それにより女性の美への争いが駆り立てられているからである。一方で、女性は男性の外見以外にも社会的地位や権力・資産に魅力を感じるため、努力によってそのハンディを乗り越えることが可能である。

第三部の章題は、「子育てや教育は子どもの成長に関係ない」というものである。あらゆるものが遺伝により受け継がれるということを行動遺伝学の科学的研究成果が示している。行動遺伝学とは、遺伝率を研究する学問である。主に一卵性双生児と二卵性双生児を

比較したり、養子に出された一卵性双生児を追跡したりする手法が用いられる。行動遺伝学によれば、神経症傾向や外交性、調和性、固執などの性格的特徴は4～5割が遺伝の影響であるとされる。性格における遺伝の影響が半分とすると、残りの半分は環境によるものとなる。遺伝（氏）は明確に定義できるが、行動遺伝学によると、子供の性格形成に家庭環境（育ち）はほとんど影響を及ぼさないことがわかっている。性格は家庭以外の非共有環境で決まるのだ。非共有環境とは、学校などでの友人関係である。集団などでのキャラや立ち位置が性格形成に影響する。すなわち『子供の人格・能力・才能形成は家庭教育と無関係である』ということを示している。そのため親の役割は、子供のやりたいことができる環境を整えてあげることのみである。

次に、著者の主張のそれぞれについての私の考えを述べたいと思う。

第一の命題について考える。外見や性格、能力、病気などは、一般に人が考えている以上に遺伝の影響を強く受けているのだと行動遺伝学は示している。しかし、社会の暗黙の規範により、発言することは許されていない。私は著者と同じく、あらゆる特性が遺伝することを多くの人が受け入れるべきだと感じる。あらかじめ知っていれば、予防や対策をすることが可能だからである。近年、ADHDという言葉をよく耳にするが、大人になって診断される人も多いといわれる。これも遺伝とするならば、ADHDの子供が周りとは違うことに苦しむことは減るのではないかと思う。また、自分の得意・不得意を理解することで、効率的に時間やお金を使うことができる。自己理解により人生を豊かにするために、あらゆることが遺伝するという事実を多くの人に知ってもらいたい。

第二についてである。見た目で実際に大きく経済格差があることがわかった。しかし私は、この容姿による経済格差は縮まっていくのではないかと思う。なぜならコロナ禍により、リモートワークが進んでいるからである。人と人が対面することが減っている中で、見た目の重要性は低下していると思う。これからまたIT化が進むことで、対面での仕事は減るのではないかと感じる。また、容姿による差別は長い間、問題になっている。最近では、ミスコンの廃止もよく聞く。とはいえ、美への意識は今では男性にまで浸透するほど高まっている。それほど容姿を気にする人が多いということだ。そのため、美貌格差が完全になくなることはないのだと思う。

第三についてである。性格形成は遺伝と非共有環境で決まり、子育てや教育（家庭環境）は無関係であるということが行動遺伝学によりわかった。しかし、私は全く家庭環境が子供の性格形成に無関係だとは思えない。家庭環境が劣悪で反発的な態度を取るような気性の荒い性格になることもあると思うからだ。また、家庭内での兄弟的な立ち位置も性格形成の要素だと思う。人それぞれではあるが、親に代わって兄弟の面倒を見ていた長女や長男が面倒見の良いしっかりした性格になることだってある。よって私は、性格形成に影響を与えるのは、遺伝と非共有環境だけではなく、家庭環境も重要になると思う。

本書は、公には言えない残酷な内容だが、それは全て統計的事実である。著者は、私たち読者に、残酷な真実に苦しんでほしいのではなく、あらかじめ真実を受け入れることで、

その真実に直面した時、深く傷つくことがないように、伝えているのだと私は思う。

《コメント》 前半では、『言うてはいけない—残酷すぎる真実—』という新書に書かれていることを要領よく、わかりやすく要約しています。その本を読んでいない人にも、およその内容がわかる優れた要約となっています。後半では、著者の見解に対して、賛成する部分と賛成できない部分を明確に分けて、批判する際には、「著者は〇〇と主張するが、私は賛同できない」と述べ、その理由を「なぜならば」以下で、その根拠を示しながら論じています。これからみなさんが論文やレポートを作成する上で、先行研究の内容を紹介し、しっかり理解した上で、それを発展させる場合であれ、批判する場合であれ、論理的に自らの知見を述べるのは大変重要です。また、このレポートは、他人（新書の著者）と自分（レポートの著者）の区別がはっきりわかるように書かれています。読む人に「これは誰の言っていることなんだろうか？」という疑問を抱かせないことが、レポートや論文の基本です。この点が守られていないレポートが散見される中、このレポートはしっかりと書かれています。